

チャレンジ！！オープンガバナンス 2020 市民／学生応募用紙

自治体提示の地域課題タイトル（注1）	No.	タイトル	自治体名
	-（事務局用）	テクノロジーを活用した区と区民との協働・協創	中野区
チームがつけたアイデア名（注2）（公開）	子育て世代に適切な情報を届け、子育てを支える住民サービスに出会って欲しい！		

（注1）地域課題タイトルは、COG2020 サイトの中に記載してある応募自治体提示の地域課題タイトルを記入してください。

（注2）アイデア名は各チームで独自にアイデアにふさわしい名前を付けてください。

1. 応募者情報 赤字部分は削除して該当の番号を記入

チーム名（公開）	Machigraphy Lab. (Code for 中野)		
チーム属性（公開）	1. 市民、2. 市民／学生混成、3. 学生	1	
メンバー数（公開）	6名		
代表者（公開）	飯沢 邦之		
メンバー（公開）	平田 祐子 丸茂 亜砂美 岩崎 光幸	熊野 壮真 田島 逸郎	

【注意書き】※ 必ず応募前にお読みください。

<応募の際のファイル名と送付先>

1. 応募の際は、ファイル名を COG2020_応募用紙_具体的チーム名_該当自治体名にして、以下まで送付してください。東京大学公共政策大学院の COG2020 サイトにある応募受付欄からもアクセスできます。admin_cog2020@pp.u-tokyo.ac.jp

<応募内容の公開>

2. アイデア名、チーム名、チーム属性、チームメンバー数、代表者と公開に同意したメンバー氏名、「アイデアの説明」は公開されます。
3. 公開条件について：
「アイデアの説明」でご記入いただく内容は、クリエイティブ・コモンズの CC BY（表示）4.0 国際ライセンスで、公開します。ただし、申請者からの要請がある場合には、CC BY-NC（表示—非営利）4.0 国際ライセンスで公開しますので、申請の際にその旨をお知らせください。いずれの場合もクレジットの付与対象は応募したチームの名称とします。
(具体的なライセンスの条件につきましては、<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/legalcode.ja>、および、<https://creativecommons.org/licenses/by-nc/4.0/legalcode.ja> をご参照ください。また、クリエイティブ・コモンズの解説もあります。<https://creativecommons.jp/licenses/>)
4. 上記の公開は、内容を確認した上で行います。（例えば公序良俗に違反するもの、剽窃があるものなどは公開いたしません）
5. この応募内容のうち、「自治体との連携」は、**非公開**です。ただし、内容に優れ今後の参考になりうると判断したものは、公開審査後アドバイスの段階で相談の上公開することがあります。

<知的所有権等の取扱い>

6. 「アイデアの説明」中に、応募したチームで作成・撮影したものではない文章、写真、図画等を使用する場合、その知的所有権を侵害していないことを確認してください。具体的には、法令に従った引用をするか、知的所有権者の許諾を取得し、その旨を注として記載してください。「自治体との連携」中も同様をお願いします。
7. 「アイデアの説明」中に、人が写りこんでいる写真を使用している場合、使用している写真に写りこんでいる人の肖像権またはプライバシーを侵害していないことを確認してください。

<チームメンバー名簿>

チームメンバーに関する情報を最終ページに記載して提出してください。（2. の扱いによる代表者氏名を除き、他のメンバーに関する情報は本人の同意があるものを除き COG 事務局からは非公開です。詳細は最終ページをご覧ください。）

アイデアの説明全体が肖像権・著作権等を侵害していないことの確認

○

(1) アイデアの内容、(2) アイデアの理由、(3) 実現までの流れ、の三項目に分けて記入してください。

2. アイデアの説明（公開）

(1) アイデアの内容（公開）

必要に応じて図表を入れていただいて結構です。

(1) アイデアの内容（公開）

アイデアは、これこれの課題解決のために、何をやる社会的な活動（サービス）なのか、をわかりやすく示してください。これが将来実現した場合、魅力的で新規性があり、実践したくなり、活用してみたいくなる、そしてその結果として、課題が解決される、そんなわくわく感のあるアイデアを期待します。2ページ以内でご記入ください。

<応募チームとして解決したい課題の要点はこれ！をごく短く書いてください>

子育て中のママは……忙しい。しんどい。孤独を感じている。

<この課題解決のためのアイデアが具体的に実行される場面を想定してください。そこで…>

<「何を」するアイデアか、それを「誰が」「いつ」「どこで」「どのように」するかをわかりやすく書いていきます>

<よいアイデアを生むには関連データの分析確認とデザイン思考によるアイデアを使う人への共感が必要です>

■背景

- ・行政側の課題:中野区にはよい子育て事業があるにもかかわらず、届けたい人に届いていないのではないかな？
- ・住民側の課題:子育ては家族だけではなく、子育てをする地域の人々同士が情報共有などの協力をするとういのではないかな？
- ・地域で協力をして子育てをするために、子育てのための人間関係を形成するきっかけが必要とされている

■目的

- ・理想とは違い、実はしんどい子育てをサポートする事業があることをもっと知ってもらいたい
- ・子育て世代のパパやママが交流するためのきっかけをアプリサービスの媒体を利用して提供したい
- ・一人で子育てをしているママが万が一の時に安心できる窓口を提供したい

以上の背景をもとに、中野区民と中野区の職員が集まった！

中野区職員と中野区住民の協働により、解決したい課題をより深掘りし、アプリの仕様や実際の開発を行うことが可能になった。地域コミュニティ Code for 中野を活動の拠点として集まっており、様々な形での参加や協働を可能にするため、一般社団法人マチグラフィーが運営を支援している。サービスデザインとアプリ開発を行っている。

■課題

中野区職員と子育てコミュニティを含む住民の協働により、サービスデザインの手法を用い、以下の課題を設定した。

(1)「子育て中のママは忙しい」

子育て中のママは子どものケアや家事に追われており、落ち着いて自治体のサービスを調べる余裕がない。そのため、自治体の子育て支援サービスそのものを知らなかったり、サービスがどういふものか調べていない可能性がある。

(2)「しんどい」

「実際に子どもとの生活が始まると、想像を超える生活環境の変化に戸惑い、「しんどい」「辛い」と感じることも多く「産後うつ」を招いてしまうケースもある。またそうした状況をパパが理解していなかったり関わりが薄いと夫婦関係が悪化する家庭もある。

(3)「人とのつながりがない」

都市部では核家族化やアウェイ育児※などの現象が起きており、孤独を感じながら子育てをしている家庭が増えてい

る。

（※自分の生まれ育った町から離れた場所での子育てのこと。）

■解決策

LINE bot を使った情報発信サービスを市民と自治体の協働で作ります

何を作るか

LINE bot により、子育てに必要な行政による情報や、地域の子育て講習やイベントなどを探しやすくする「入り口」を作る。

LINE bot を使う理由 1:子育て世代の普及率が高い

ママが必要とする情報にたどり着くまでには複数の web サイトがあり、自治体サービスやイベントの情報が分かれていたりする。ウェブ検索をすると子育てホームページが出てきたり、中野区のホームページが表示されるなど、目的とする情報にたどり着くのが困難な場合がある。子育て世代に特に利用率の高い LINE を用いてアプリ開発を行うことで子育てサービスへの窓口を提供する。

LINE bot を使う理由 2:スマホで手軽に

地域イベントの開催情報はホームページに掲載されても掲載期間が短く、ウェブ検索からは探しにくいことがある。週末などに子ども連れで地域イベントに参加しようとしている家族が出先でスマホからイベントの開催情報を LINE アプリからいつでも探せるようにする。夜間に家でひとりで育児をしているママが緊急時に慌てずにすぐに電話がかけられるような万が一の備えを提供する。

2. アイデアの説明（公開）

(2) アイデアの理由（公開）

(2) アイデアの理由（公開）

このアイデアを提案する理由について、それをサポートするデータを根拠として示しつつ 2 ページ以内で説明してください。ここではアイデアの必要性、効果を確認します。データとは、統計類などの数値データやアンケート・インタビュー・経験の記述、関連の計画、既存の施策などの定性データも広く含みます。データは出所を明らかにしてください。

<このアイデアを提案する理由（なぜ）を書いていきます>

<先の（1）で書いた「何を」「誰が」「いつ」「どこで」「どのように」というアイデアの内容を支えるための、「なぜ」これをやりたいのかの思いを上記のデータを示しつつ書いていきます>

中野区の住民と職員で、データや資料を集めて皆で分析した。

子育て世代の LINE 利用率が 8 割。

ソーシャルメディアの利用状況

総務省 特集 人口減少時代の ICT による持続的成長

https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h30/html/nd142210.html?fbclid=IwAR2Vu1gy7SJ6jNz0Af2B8npK5C2FxoP-Mh7hlN-xld_aDXILag5R-uIuBTY

ALBELT 自治体における AI チャットボットの普及に向け、オープンデータ化について報告書を公開

https://www.albert2005.co.jp/release/201906/26_140039.html?fbclid=IwAR0puDOU4hHwkcx0WK0xIDOpTlRxwoVf6E4EWCcxfWAZHHLp4OxUF3-Y-UM

Gajax 主要 SNS ユーザー数データ

<https://gaiax-socialmedialab.jp/post-30833/>

他、定性データはママへのインタビューを実施して課題などの内容に記載の通り。

(3) アイデア実現までの流れ（公開）

アイデアを実現する主体、アイデアの実現に必要な資源（ヒト、モノ、カネ）の大まかな規模とその現実的な調達方法、アイデアの実現にいたる時間軸を含むプロセス、実現の制度的制約がある場合にはその解決策等、アイデア実現までの大まかな流れについて、**2 ページ以内**でご記入ください。ここでは実現可能性を確認します。

<アイデアに即した実現に向けての具体的な活動を上記のポイントに即して工夫して書いていきま>

■ヒト

・自治体と住民の協働 週に1回、1時間の定例ミーティング

Code for 中野では、中野区職員と地域住民を中心としたチームで毎週定例を実施している。定例時には各自が担当する作業の内容について報告や確認をしながら、自治体と住民の協働を推進している。

・チームの構成と関わり方 リモートによるコミュニケーション

コロナ禍でのプロジェクト進行となり、対面でのミーティングが困難な状況にあった。当初、夏前に公開の予定であったが、自治体側でのコロナへの対応が急務となり、中野区職員の方の参加が厳しい時期は他メンバーで内容を練り、充実を計った。

・協働をしていく体制

住民と自治体がチームを組み、アプリ開発を行うことで機能などのフィードバックをすぐに得ることができるので、積極的にプロトタイプの質を向上できる体制で取り組んでいる。住民と区の職員が自己開示を行うなどのワークを行い、互いに遺憾無く議論が交わされるように、場作りをメンバー間で心がけながら進めている。

・プロジェクトへの共通認識

プロジェクトを進めていく過程で自治体では過去に事例のない開発の仕組みや住民調査の手法などを勉強会を通じて、共通認識をできるだけ持てるように配慮した。今後も継続開発をしていく過程で必要に応じて、勉強会などを実施し、相互理解の上、進行ができるように互いに心がけている。

■モノ

住民目線 + 開発視点の有意義なオープンデータ利活用

自治体ではオープンデータの公開が進んでいるが、住民目線でのオープンデータ活用が課題感として挙げられる。アプリ開発をする中で具体的な利用に即してオープンデータの内容を改善することで、実用性の高いオープンデータの活用を目指す。

うまくいかない時はやり直しがきく開発

「届けたい対象へ届くサービスになっているか」を確かめながら開発するため、アジャイル開発の考え方に則って、アイデアを具現化する。開発フェーズを短い期間に区切り「少し作って確かめる」のループを繰り返すことでより使いやすいアプリを目指す。

■カネ

・プロボノによるサービス提供

チームの半数以上が普段はサービスや技術開発を提供しているメンバーであり、インタビューの知見やアプリ開発の専

門家のため、開発費用については無償で実現している。サーバーの利用料金分（年間で多くて数万程度）のみ社団法人で負担をする。社団法人は区の補助金などを応募し、資金を得るよう努めている。

・協定などを結ぶ

中野区と一般社団法人で 2021 年中に協定を結び、アプリ開発の継続開発していく。（既にプロジェクトのワークやプロトタイプは実施中。）

スケジュール**2020 年**

3 月 キックオフ、顔合わせ

4 月 課題や内容についての協議開始

5 月 コロナの影響を考慮してリモートでの定例を開始

9 月 中野区関係職員への勉強会の実施。サービスデザイン、リスタートアップ、アジャイルソフトウェア開発手法の 3 回に分けて行った

10 月 Code for Japan summit への参加

11 月 リンキャンバスなどを利用したワーク

12 月 アプリの機能テストなどの開始 ← 今ココ

2021 年

3 月 アプリローンチ

以後、3 ヶ月間を区切りとして継続開発を実施していく。